

## 宮澤賢治

### 「雨ニモマケズ」の原典について

「雨ニモマケズ」の原典は、賢治の死後に発見された、賢治の手帳の中に手書きされたメロ風の散文の詩です。そのため、賢治の手によって清書されたものや、賢治の意思で活字になったものはありません。賢治の口で詠まれたという記録もありません。

書かれた時期は一九三二（昭和六）年の十一月頃のようにです。原典をそのまま写真にしたものが、「校本宮澤賢治全集第十二巻（上）」、筑摩書房（昭和五十年）」にあります。

原典は漢字交じりの片仮名文です。振り仮名はありません。字の配置は整っていません。

後に活字化された多くの文献に見られる「ヒデリノトキハ・・・」の「ヒデリ」は原典では「ヒドリ」となっています。

原典には所々に書き直した跡がみられますが、賢治は書きながら直したのかも知れません。書いた後で改めて推敲したのではないようです。それで、原典の「ヒドリ」は、賢治の生きた時代や事情から「ヒデリ」の誤記であろうという説があります。多くの文献では「ヒデリ」となっています。パロル社の「雨ニモマケズ（一九九一年）」などでは原典のまま「ヒドリ」となっています。

文字遣いですが、多くの読み物で「北ニケンカヤ・・・」とあるのは、原典では「北ニケンクワヤ・・・」となっています。

原典には漢字が幾つかあって、大体において常識的に読み方が一通りですが、複数通りに読める漢字は賢治がどう読んだものでしょうか。後世の学術的な文献では漢字に振り仮名はありません。読み物の場合は朗読、音読をするときに読み方が解らないと困るため、漢字には仮名が振ってありますが、例外として「四合」の「四」だけは多くの読み物で振り仮名が付いていません。これはたぶん、編集者がどう読むのか迷ったからでしょう。

「四合」は「シゴウ、シンゴウ、ヨンゴウ」などと読めそうです。前記のパロル社の本では「四」に「ヨン」と振られています。「東」も複数に読めますが、各読み物とも「タバ」で揃っています。

「四」や「東」について、賢治がどう読んだか、あるいは「ヒドリ」か「ヒデリ」かなどを突き詰めて考えないこととします。